

琉球大学学術リポジトリ

「世界のウチナンチュ大会」と沖縄県系人ネットワーク

(2) ー参加者の〈声〉に見るアイデンティティと紐帯の今後ー

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学移民研究センター 公開日: 2018-11-13 キーワード (Ja): 沖縄, ウチナンチュ, ハワイ, 女性, ネットワーク キーワード (En): 作成者: 野入, 直美, Noiri, Naomi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002010149

「世界のウチナーンチュ大会」と沖縄県系人ネットワーク (2) —参加者のく声>に見るアイデンティティと紐帯の今後—

野入直美

- I. はじめに
- II. 世界のウチナーンチュ大会の参加者たち—基本属性
- III. 参加者による大会の評価
- IV. ハワイの特徴—ウチナーネットワークの自足性
- V. 重要な構成要素としての女性参加者たち
- VI. 沖縄県系ネットワークの展望—大会参加者の声を中心に

キーワード： 沖縄, ウチナーンチュ, ハワイ, 女性, ネットワーク

I. はじめに

「世界のウチナーンチュ大会」(以後、大会と表記)は、沖縄県が1990年から5年ごとに開催してきた、沖縄で最大規模のコンベンション事業である。第4回大会は、2006年の10月に開催された。沖縄県によると、世界21カ国、さらに国内と県内から、およそ4,900人という過去最多の人々が集った。参加者たちは、さまざまなイベントを通して沖縄への愛着や誇り、アイデンティティを確かめ合い、交流を行った。

この章では、まず、第4回大会参加者を対象として行ったアンケート調査の集計結果をもとに、どのような人々が参加し、彼らは大会をどう評価しているのかを記述する。次に、参加者の中でひとつの層をなしている重要なカテゴリーとして、ハワイからの参加者と女性参加者をとりあげて分析を試みる。ハワイの沖縄県系ネットワークについては、く自足性>という仮説を提示する。最後に、アンケートの自由回答の記述をもとに、沖縄県系の越境的なネットワークの今後について、課題を整理する。

II. 世界のウチナーンチュ大会の参加者たち—基本属性

第4回大会の参加者のうち、今回のアンケート調査¹⁾に回答した人々は、年齢区分は、60-64歳が最も多かった(表1)。55歳から74歳までの回答者で、全体の約53%にのぼる。80代の回答者も36人おり、高齢者のエネルギーと、ウチナーンチュ大会によせる思いの深さが感じられる。

男女別では、男性が4割弱、女性が6割強であった(表1)。とくに50代では、女性の回答者は男性の2.5倍を上回った。やはり、働き盛りの世代の男性は少ない。女性と高齢者が、分厚い層を成してウチナーンチュ大会の参加者を構成していることがわかった。

表1 年齢階級および性別（設問1）

年齢	性別			[単位：票，%]	
	男	女	不明	合計	構成比
85-89	2	6	1	9	1.2
80-84	10	17	0	27	3.5
75-79	24	36	0	60	7.7
70-74	37	45	1	83	10.7
65-69	42	59	2	103	13.2
60-64	55	68	0	123	15.8
55-59	25	73	3	101	13.0
50-54	21	47	0	68	8.7
45-49	15	23	1	39	5.0
40-44	22	15	1	38	4.9
35-39	10	15	0	25	3.2
30-34	12	25	1	38	4.9
25-29	12	22	1	35	4.5
20-24	10	6	2	18	2.3
15-19	1	4	0	5	0.6
不明	2	4	0	6	0.8
合計	300	465	13	778	100.0

資料：「第4回 世界のウチナーンチュ大会」アンケート調査

注：設問1について出生年および性別のいずれかを記入した有効回答は778票。

表2 沖縄系移民である場合の世代（設問2B）

世代	[単位：票，%]	
	回答数	構成比
1世	110	18.8
2世	219	37.4
3世	213	36.3
4世	33	5.6
5世	2	0.3
不明	9	1.5
合計	586	100.0

資料：「第4回 世界のウチナーンチュ大会」アンケート調査

注1)：設問2について、「(1) 移民__世」を選択した586票について集計

2)：不明は、選択肢「(1) 移民__世」に印を付けているものの、具体的な世代が記入されていないもの。

世代では、2世と3世がほぼ同じ比率（約36～37%）で、1世は約19%であった（表2）。また、沖縄系移民の何世かを問う質問に対して、「沖縄系ではない」と答えた人が約17%と、かなりの比率を占めた（表3）。ここには、沖縄系の人の配偶者など、家族・親族としてウチナーンチュにつながる人、そして、沖縄系の人の親しい友人、沖縄に関心を持って県人会活動に加わっている人などが含まれると思われる。第4回大会では、海外で生まれた世代、さらに「沖縄系ではない」人々も巻き込んで、参加者の層が広がっていることが明らかになった。

表3 沖縄系移民であるかどうか (設問 2A)

[単位: 票, %]

選択肢	回答数	構成比
(1) 沖縄系移民である	586	77.4
(2) 世代がわからない	4	0.5
(3) 沖縄系ではない	126	16.6
(4) その他	41	5.4
合計	757	100.0

資料: 「第4回 世界のウチナーンチュ大会」アンケート調査
 注: 設問2についての有効回答757票。

表4 居住国と性別 (設問 4)

[単位: 票, %]

居住国	男	女	合計	構成比
アメリカ合衆国	175	313	488	63.8
ブラジル	38	35	73	9.5
カナダ	29	23	52	6.8
日本	15	27	42	5.5
ペルー	12	28	40	5.2
アルゼンチン	11	10	21	2.7
フィリピン	1	11	12	1.6
キューバ	2	4	6	0.8
ドイツ	3	2	5	0.7
メキシコ	3	2	5	0.7
イギリス	2	1	3	0.4
ボリビア	1	2	3	0.4
オーストラリア	0	1	1	0.1
オランダ	0	1	1	0.1
ザンビア	0	1	1	0.1
スウェーデン	1	0	1	0.1
タイ	1	0	1	0.1
ニュージーランド	1	0	1	0.1
ベルギー	1	0	1	0.1
中国	1	0	1	0.1
不明	3	4	7	0.9
居住国合計	300	465	765	100.0

資料: 「第4回 世界のウチナーンチュ大会」アンケート調査
 注1): 回答によっては国名を記入していないものもあるため、出生州・
 県などの記入内容から出生国を類推した。
 2): 出生国として記入された地名が、現在のものと異なる場合がある。
 ここでは集計のために現在の国名や地域名を用いた。
 3): 表中の構成比は、有効票787のうち性別が把握できた765票を100%
 としたものの。

表5 県人会への所属状況 (設問 5)

[単位: 票, %]

選択肢	回答数	構成比
(1) 所属している	556	74.0
(2) 所属していない	195	26.0
合計	751	100.0

資料: 「第4回 世界のウチナーンチュ大会」アンケート調査
 注: 設問5についての有効回答は751票。

表6 回答者の日本語能力（設問6）

選択肢	[単位：票，%]	
	回答数	構成比
(1) 全くできない。もしくは、あいさつ程度。	297	39.1
(2) 日常の会話を聞き取れるが、話すことができない。	121	15.9
(3) 日常の会話で話したり聞いたりできる。	173	22.8
(4) 日本語で不自由なく議論できる。	169	22.2
合計	760	100.0

資料：「第4回 世界のウチナーンチュ大会」アンケート調査

注：設問6についての有効回答は760票。

表7 回答者の職業（設問7）

選択肢	[単位：票，%]	
	回答数	構成比
(1) 会社経営	52	6.9
(2) 専門職、技術職	237	31.6
(3) 自営業	85	11.3
(4) 事務・営業職、銀行員、公務員	143	19.1
(5) 工務、労務、販売・サービス	74	9.9
(6) 家族の自営業の手伝い	12	1.6
(7) 学生	18	2.4
(8) 家事	55	7.3
(9) その他	73	9.7
合計	749	100.0

資料：「第4回 世界のウチナーンチュ大会」アンケート調査

注：設問7についての有効回答は749票。

現在の居住地は、アメリカ合衆国が約64%であり、非常に高い比率を占めていた（表4）。また、ハワイ州からの参加者は、アメリカ合衆国からの参加者の約56%を占めていた。

県人会には、7割以上の回答者が所属していた（表5）。県人会に属していない人々には、大会の情報が届きにくいことや、参加の動機づけも得にくいことがある。そのため、結果としてウチナーンチュ大会参加者には県人会員が多くなっていることが推測される。

日本語能力では、「全くできない、もしくはあいさつ程度」が約4割にのぼった（表6）。日本語による意思疎通は、ごく限られた場でしか成り立たない。日本語は、世界の沖縄県系人にとって、共通の文化、人々を結び合わせる紐帯とは言えなくなっている。

職業では、「専門職、技術職」が最も多く、約32%であった（表7）。次いで、「事務・営業職、銀行員、公務員」という、ホワイトカラーの被雇用者が約19%であった。「会社経営」と「自営業」は、合わせて約18%であった。前述したように、1世よりも2世・3世の参加者の方が多くなっている。それを反映して、自営業者よりも被雇用者が多い職業分布になっていると考えられる。

Ⅲ. 参加者による大会の評価

1) 参加者にとっての大会の成果

回答者にとって、沖縄に来た目的は、「大会への参加」が9割以上だが、複数回答で、「親戚訪問」、「名所旧跡の観光」も、それぞれ半数以上の人々が目的にしていた(表8)。

これまでの大会への参加状況は、今回が初めての人が、回答者の約72%であった(表9)。新規参加者は、リピーターよりも圧倒的に多いことがわかった。

参加した行事は、回答者の7割以上が集中しているのが前夜祭パレード、開会式、閉会式であった(表10)。次いで、ウチナーチャンプルーフェスタも回答者の過半数が参加していた。あとは、琉球交響楽団コンサート、首里城公演「琉球王朝一舞への誘い」、ミュージカル「海から豚がやってきた!!」、琉球古典芸能鑑賞会など、容量の大きい会場で行われ、入場制限がないなど、入りやすい催しの参加者が、数的には多くなっている。

印象に残った行事について、行事参加者のうちどれくらいの人が「印象に残った」としているかという割合をみると、最も高いものは前夜祭パレードで、次いで閉会式・グランドフィナーレであった(表11)。ミュージカル「海から豚がやってきた!!」の印象度は開会式よりも、僅かに勝っている。これはひとつには、ミュージカルが描いたハワイの沖縄県系人による沖縄の救援運動が、回答者の35%を占めるハワイからの参加者にとってひとしお感慨深かったためであろうと思われる。

表8 沖縄に来た目的(設問9)

選択肢(複数回答可)	[単位:票, %]	
	回答数	回答率
(1)ウチナーンチュ大会への参加	697	90.6
(2)親戚訪問	467	60.7
(3)友人・知人に会う	222	28.9
(4)ビジネス	25	3.3
(5)那覇まつり等沖縄の行事を見る	152	19.8
(6)名所・旧跡の観光	405	52.7
(7)買い物	327	42.5
(8)その他	63	8.2

資料:「第4回 世界のウチナーンチュ大会」アンケート調査

注:回答率は設問9についての有効回答769票を100%としたもの。

表9 「世界のウチナーンチュ大会」への参加状況(設問10)

選択肢(複数回答可)	[単位:票, %]	
	回答数	回答率
(1)第1回大会(1990年)	61	8.1
(2)第2回大会(1995年)	91	12.1
(3)第3回大会(2001年)	159	21.1
(4)今回が初めて	543	72.1

資料:「第4回 世界のウチナーンチュ大会」アンケート調査

注:回答率は設問10についての有効回答753票を100%としたもの。

表10 「第4回 世界のウチナーンチュ大会」で参加した行事（設問11）

選択肢（複数回答可）	回答数	回答率
(1) 平和体験・植樹ツアー	83票	11.0%
(2) 前夜祭パレード	587	77.7
(3) 開会式	675	89.4
(4) ウチナーチャンプルーフェスタ	393	52.1
(5) ワールドウチナーシンポジウム	78	10.3
(6) ワールドビジネスフェア・シンポジウム	47	6.2
(7) ミュージカル公演「海から豚がやってきた!!」	169	22.4
(8) 琉球古典芸能鑑賞会	151	20.0
(9) 首里城公演「琉球王朝一舞への誘い」	201	26.6
(10) 平和ワーク「世界と沖縄」展	53	7.0
(11) 空手道・古武道交流祭	40	5.3
(12) 国際親善ゲートボール大会	27	3.6
(13) 国際親善サッカー大会	2	0.3
(14) NHKのど自慢	51	6.8
(15) 琉球交響楽団コンサート	196	26.0
(16) 閉会式・グランドフィナーレ	536	71.0
(17) その他の応援イベント	54	7.2

資料：「第4回 世界のウチナーンチュ大会」アンケート調査

注：回答率は設問11についての有効回答754票を100%としたもの。

表11 「第4回 世界のウチナーンチュ大会」で印象に残った行事（設問12）

選択肢（設問11から3つ選択可）	回答数	回答率	行事参加者	行事参加者に占める割合
	(A)		(B)	(A)/(B)
(1) 平和体験・植樹ツアー	26票	38.0%	83票	31.3%
(2) 前夜祭パレード	418	60.9	587	71.2
(3) 開会式	419	61.1	675	62.1
(4) ウチナーチャンプルーフェスタ	173	25.2	393	44.0
(5) ワールドウチナーシンポジウム	29	4.2	78	37.2
(6) ワールドビジネスフェア・シンポジウム	17	2.5	47	36.2
(7) ミュージカル公演「海から豚がやってきた!!」	108	15.7	169	63.9
(8) 琉球古典芸能鑑賞会	71	10.3	151	47.0
(9) 首里城公演「琉球王朝一舞への誘い」	66	9.6	201	32.8
(10) 平和ワーク「世界と沖縄」展	10	1.5	53	18.9
(11) 空手道・古美術交流祭	17	2.5	40	42.5
(12) 国際親善ゲートボール大会	14	2.0	27	51.9
(13) 国際親善サッカー大会	12	1.7	2	600.0
(14) NHKのど自慢	26	3.8	51	51.0
(15) 琉球交響楽団コンサート	91	13.3	196	46.4
(16) 閉会式・グランドフィナーレ	378	55.1	536	70.5
(17) その他の応援イベント	30	4.4	54	55.6
無記入	153	22.3	-	-

資料：「第4回 世界のウチナーンチュ大会」アンケート調査

注1：回答率は設問12についての有効回答686票を100%としたもの。

注2：行事参加者は、設問11の各選択肢を選択した回答数。

注3：必ずしも設問11で選択した参加行事の中から印象に残った行事を選択してない場合もある。

注4：無記入は、印象に残った行事を1つもしくは2つしか記入していない調査票の数。

参加した感想は、「とても楽しんだ」が約 78%、「楽しんだ」が約 21%と、非常に満足度が高い結果となっている(表 12)。ただし、今後に向けての課題を考える上で、「(あまり) 楽しめなかった」人たち、楽しんだ中にも、もっと工夫できるはずだと感じた人たちの声にも、耳を傾ける必要があると思われる。それについては、アンケートの自由回答に基づいて後述する。

この大会の成果は、「沖縄の伝統・文化・風土への理解が深まった」が 74%で最も高かった(表 13)。「自分が沖縄系であることを認識した」、「移民の歴史への理解が深まった」、「世界のウチナーンチュ同士の交流が深まった」も、約 6 割の回答を得た。一方、回答が少なかったのは、「ビジネス交流が促進された」約 7%、「自国の文化を沖縄県民に紹介できた」26%であった。参加者は、アイデンティティの確認という大会目的については、成果を実感していると言える。一方で、幅広い交流については、とくにビジネス交流に大きな課題が残っていることが明らかになった。

表 12 「第 4 回 世界のウチナーンチュ大会」に参加した感想 (設問 13)

[単位: 票, %]

選択肢	回答数	構成比
(1) とても楽しんだ	585	78.1
(2) 楽しんだ	156	20.8
(3) あまり楽しめなかった	7	0.9
(4) 楽しめなかった	1	0.1
合計	749	100.0

資料: 「第 4 回 世界のウチナーンチュ大会」アンケート調査
 注: 設問 13 についての有効回答は 749 票。

表 13 「第 4 回 世界のウチナーンチュ大会」の成果 (設問 15)

[単位: 票, %]

選択肢 (複数選択可)	回答数	回答率
(1) 移民の歴史への理解が深まった。	449	58.9
(2) 自分が沖縄系であることを認識した。	451	59.2
(3) 沖縄の伝統・文化・風土への理解が深まった。	567	74.4
(4) 海外参加者と県民の交流が深まった。	412	54.1
(5) 世界のウチナーンチュ同士の交流が深まった。	436	57.2
(6) 世代間の交流が深まった。	351	46.1
(7) 自国の文化を沖縄県民に紹介できた。	199	26.1
(8) ビジネス交流が促進された。	51	6.7
(9) 観光地としての沖縄の魅力を知ることができた。	415	54.5
(10) 平和の大切さを感じることができた。	368	48.3
(11) ウチナーネットワークの次世代の担い手育成のきっかけになった。	266	34.9
(12) その他	30	3.9

資料: 「第 4 回 世界のウチナーンチュ大会」アンケート調査
 注: 回答率は設問 15 についての有効回答 762 票を 100%としたもの。

今後の大会の継続については、95%の回答者が「継続すべき」と答えており、大会の継続に対する要望はきわめて大きいことがわかった（表14）。

表14 「世界のウチナーンチュ大会」を今後も継続すべきどうか（設問16）

選択肢	[単位：票，%]	
	回答数	回答率
(1) 継続すべき	713	94.9
(2) 内容を変えて継続すべき	35	4.7
(3) 継続すべきでない	1	0.1
(4) わからない	2	0.3
合計	751	100.0

資料：「第4回 世界のウチナーンチュ大会」アンケート調査
注：設問16についての751票。

2) 次世代への継承と今後の交流

回答者が所属している沖縄県人会活動の、次世代への継承について、「うまくいっている」は約37%であった（表15）。「どちらかというとうまくいっている」とあわせれば、7割以上の人が肯定的である。

沖縄県が大会当時、実施を検討していた「ホストファミリーバンク制度」²⁾については、「ぜひ利用したい」が4割であり、期待があることが明らかになった（表16）。

今後、世界のウチナーンチュが交流を深めていくべき分野としては、「県人会などの活動」、「芸能・文化」が約7割であった（表17）。そこからかなり数値が落ちて、「人材育成」49%が続く。ウチナーンチュ大会の成果としては実感の薄かった「ビジネス」は、20%の回答者が、今後の交流の課題として挙げている。

今後の具体的な交流予定は、「ある」「ない」がほぼ半々であった。ほぼ半数の人が、電子メールなどで連絡を取り合おうとしていることの意味は、決して小さいものではないと思われる。

表15 沖縄県人会活動の次世代への継承（設問17）

選択肢	[単位：票，%]	
	回答数	構成比
(1) うまくいっている	263	37.4
(2) どちらかというとうまくいっている	245	34.8
(3) あまりうまくいっていない	73	10.4
(4) うまくいっていない	14	2.0
(5) わからない	109	15.5
合計	704	100.0

資料：「第4回 世界のウチナーンチュ大会」アンケート調査
注：設問17についての有効回答は704票。

表 16 「ホストファミリーバンク制度」利用の意向 (設問 18)

[単位：票， %]		
選択肢	回答数	回答率
(1) 是非利用したい	290	40.1
(2) 条件があえば利用したい	209	28.9
(3) 利用したくない	49	6.8
(4) わからない	175	24.2
合計	723	100.0

資料：「第4回 世界のウチナーンチュ大会」アンケート調査
 注：設問 18 についての有効回答は 723 票。

表 17 交流を深めていくべき分野 (設問 19)

[単位：票， %]		
選択肢 (複数回答可)	回答数	回答率
(1) 県人会などの活動	521	71.7
(2) 芸能・文化	492	67.7
(3) 空手・古武道	162	22.3
(4) スポーツ	222	30.5
(5) ビジネス	142	19.5
(6) 行政・政治	106	14.6
(7) 人材育成	357	49.1
(8) その他	42	5.8

資料：「第4回 世界のウチナーンチュ大会」アンケート調査
 注：回答率は設問 19 についての有効回答 727 票を 100%としたもの。

IV. ハワイの特徴—ウチナーネットワークの自足性

今回のアンケート調査では、有効回答 787 のうち、アメリカ合衆国に居住する人が 497 人 (約 63%)、うちハワイ州に居住する人が 277 人 (全体の約 35%) であった。大会に参加した中で唯一、チャーター機で参加者が沖縄入りしたハワイの一行は、今回の大会において、きわめて大きな存在感を示していた。

ハワイにおける沖縄系ネットワークの凝集力が強さと活発さは、世界のウチナーンチュ大会への参加に限ったことではない。また、そのハワイ在住の人々が、世界のウチナーネットワークにおいても先駆的な役割を果たしてきたことは、しばしば指摘されている。この節では、いくつかの質問項目の回答について、ハワイ州の参加者と、アメリカの他州の参加者、そして参加者全体とを比較し、ウチナー・アイデンティティや次世代への継承をめぐって、ハワイの特徴を考察する。

回答者の日本語能力について、ハワイ州の参加者の日本語能力が、相対的に低いということは興味深い (表 18)。日常会話のレベルまで含めて日本語を話せる人は、ハワイ州では 31%だが、その他の合衆国と全体では 44~45%である。ハワイの沖縄県系人の凝集力は、日本語以外のものによって支えられていることが推測される。

表 18 回答者の日本語能力：ハワイ・他の合衆国・全体（設問6）

[単位：票, (%)]			
選択肢	ハワイ (比率)	他州 (比率)	全体 (比率)
(1) 全くできない。もしくは、あいさつ程度。	124(46.3)	84(43.5)	297(39.1)
(2) 日常の会話を聞き取れるが、話すことができない。	61(22.8)	24(12.4)	121(15.9)
(3) 日常の会話で話したり聞いたりできる。	58(21.6)	26(13.5)	173(22.8)
(4) 日本語で不自由なく議論できる。	25(9.3)	59(30.6)	169(22.2)
合計	268(100.0)	193(100.0)	760(100.0)

資料：「第4回世界のウチナーンチュ」アンケート

表 19 沖縄県人会活動の次世代への継承（設問17）

[単位：票, (%)]			
選択肢	ハワイ州 (比率)	他州 (比率)	全体 (比率)
(1) うまくいっている	113 (46.1)	61 (33.7)	263 (37.4)
(2) どちらかというと、うまくいっている	91 (37.1)	50 (27.6)	245 (34.8)
(3) あまりうまくいっていない	16 (6.5)	18 (9.9)	73 (10.4)
(4) うまくいっていない	0 (0.0)	2 (1.0)	14 (2.0)
(5) わからない	25 (10.2)	50 (27.6)	109 (15.5)

資料：「第4回世界のウチナーンチュ」アンケート調査

表 20 「第4回 世界のウチナーンチュ大会」の成果（設問15）

[単位：票, (%)]			
選択肢 (複数回答可)	ハワイ州 (比率)	他州 (比率)	全体 (比率)
(1) 移民の歴史への理解が深まった。	161 (60.3)	120 (62.2)	228 (58.9)
(2) 自分が沖縄系であることを認識した。	159 (59.6)	118 (61.1)	450 (59.1)
(3) 沖縄の伝統・文化・風土への理解が深まった。	210 (78.7)	158 (81.9)	566 (74.4)
(4) 海外参加者と県民との交流が深まった。	137 (51.3)	108 (56.0)	412 (54.1)
(5) 世界のウチナーンチュ同士の交流が深まった。	148 (55.4)	110 (57.0)	436 (57.3)
(6) 世代間の交流が深まった。	124 (46.4)	96 (49.7)	351 (46.1)
(7) 自国の文化を沖縄県民に紹介できた。	59 (22.1)	47 (24.4)	199 (26.1)
(8) ビジネス交流が促進された。	16 (6.0)	11 (5.7)	51 (6.7)
(9) 観光地としての沖縄の魅力を知ることができた。	132 (49.4)	107 (55.4)	414 (54.4)
(10) 平和の大切さを感じる事ができた。	125 (46.8)	103 (53.4)	368 (48.4)
(11) ウチナーネットワークの次世代の担い手育成のきっかけになった。	69 (25.8)	55 (28.5)	265 (34.8)
(12) その他	7 (2.6)	11 (5.7)	30 (3.9)
合計	277 (100.0)	193 (100.0)	484 (100.0)

資料：「第4回世界のウチナーンチュ」アンケート調査

一方で、所属している沖縄県人会の次世代の継承については、ハワイからの参加者は、「どちらかというと」うまくいっている」と答えた人の比率が、相対的に高い（表19）。ハワイ以外の合衆国は、全体よりもやや低くなっている。ハワイ沖縄県人会の強さが、この回答全体の肯定的な答えの比率を押し上げていると言えそうである。

ところが、今回の大会の成果についての設問では、ハワイからの参加者で「ウチナーネットワークの次世代担い手育成のきっかけになった」と答えた人の比率は、参加者全体の

表 21 今後の交流予定 (設問 20)

[単位: 票, (%)]

選択肢	ハワイ州 (比率)		他州 (比率)		全体 (比率)	
(1) ある	94	(40.5)	78	(44.1)	338	(50.1)
(2) ない	138	(59.5)	99	(55.9)	337	(49.9)
合計	232	(100.0)	177	(100.0)	675	(100.0)

資料: 「第4回世界のウチナーンチュ」アンケート調査

比率よりも低かった (表 20)。ハワイでは、大会に参加する前から、すでに次世代の継承がわりとうまくいっているという認識がある。そのことは、結果として、大会の評価をやや辛口にしているのではないだろうか。

さらに興味深いのは、今後の展望である。海外のウチナーンチュとの交流予定の有無について、全体では「ある」と「ない」がほぼ半々だったのに対して、ハワイからの参加者は、「ない」が「ある」を19%も上回った (表 21)。

今後、交流を深めていくべき分野についての回答では、ハワイは全体と比較して、ほとんど違いがなかった。ビジネスについても人材育成についても、海外のウチナーンチュとの交流に、ハワイの人々がとくに高い期待を寄せているというわけではないのである。

ここから導き出されるのは、<ハワイのウチナーネットワークの自足性>という仮説である。ハワイの沖縄県系の人々のウチナーネットワークは、良くも悪くも、ハワイの中である程度、自足できるだけの成熟をとげているのではないだろうか。そこには、ハワイの島嶼性という地理的条件と、沖縄県系人の集住密度の高さなどの社会的要件も作用しているであろう。

ハワイの中だけでも十分にウチナーネットワークの恩恵を感じ、次世代の育成もそれなりに進み、ウチナー・アイデンティティを実感する機会も豊富であるために、ハワイ在住の沖縄県系の人々は、とくに海外とのネットワークに期待しなくても、それなりに自足しているのではないだろうか。さらに仮説的に述べるならば、ハワイ在住の沖縄県系の人々のまなざしは、海外のウチナーネットワークよりも、自らのルーツである沖縄島に、熱く注がれているのではないだろうか。

一方で、世界のウチナーネットワークにおいては、ハワイの存在感は突出しており、その牽引力への期待があるように思われる。

地域社会の中で自足的なネットワークを成熟させていくハワイ式の展開に対して、島嶼性や、沖縄県系人の高い集住性といった地理的・社会的要件を持たないロサンゼルスや、ブラジルのサンパウロ、その他の南米の都市においては、別の形の展開が必要とされるであろう。2008年にブラジルとアルゼンチンが移民100周年を迎えるとき、世界のウチナー

ネットワークにおけるハワイの牽引性は、どのように継続し、あるいは変容していくのか。今回のアンケート調査の結果が示唆する仮説は、今後の越境的なウチナーネットワークの生成をめぐる問いへと結びついている。

V. 重要な構成要素としての女性参加者たち

女性は、このアンケート調査の回答者の約6割を占めている。

大会参加者に女性が多い理由として、専業主婦など、仕事に拘束されていない人が多いためではないかという考えが浮かぶが、これは当てはまらないことがわかった。回答者の職業を見ると、「事務・営業職・銀行員・公務員」で女性の占める割合がかなり高く、「専門職・技術職」も多い（表22）。一方、職業について、「家事」と答えた女性は52人だけであった。約半数の女性は、休暇をとって大会に参加している（表23）。現役で働き、そ

表22 性別・職業別にみたアンケート回答者の特徴（設問7）

[単位：票]

性別	① 会社 経営	② 専門 職、 技術 職	③ 自 営 業	④ 銀行 員・ 営業 職員、 公務 員	⑤ 工務 ・サ ービ ス、 販	⑥ 家族 の自 営業 の	⑦ 学 生	⑧ 家 事	⑨ そ の 他	合 計	構 成 比 (%)
男	36	96	41	31	39	4	8	0	31	286	38.6
女	16	137	40	107	34	7	9	52	40	442	59.6
不明	0	3	3	3	0	1	1	2	0	13	1.8
合計	52	236	84	141	73	12	18	54	71	741	100.0

資料：「第4回 世界のウチナーンチュ大会」アンケート調査

注：設問1および設問7がともに有効回答である調査票は741票。

表23 性別・休暇取得方法別にみたアンケート回答者の特徴（設問8）

[単位：票]

性別	① 休暇 をと った	② 仕 事 の 一 環 と し	③ 仕 事 に つ い て 引 退 し て な い に つ い て 引 退 し	④ そ の 他	合 計	構 成 比 (%)
男	144	10	103	33	290	39.1
女	211	10	169	48	438	59.1
不明	5	0	4	4	13	1.8
合計	360	20	276	85	741	100.0

資料：「第4回 世界のウチナーンチュ大会」アンケート調査

注：設問1および設問8がともに有効回答である調査票は741票。

表 24 性別・大会参加感想別にみたアンケート回答者の特徴 (設問 13)

[単位: 票]

性別	① とても楽しんだ	② 楽しんだ	③ あまり楽しめな かった	④ 楽しめなかつた	合 計	構 成 比 (%)
男	225	61	3	0	289	39.5
女	344	91	4	1	440	60.2
不明	10	2	0	0	12	1.6
合計	579	154	7	1	741	101.4

資料: 「第 4 回 世界のウチナーンチュ大会」アンケート調査

注: 設問 1 および設問 13 がともに有効回答である調査票は 741 票。

表 25 性別・大会成果別にみたアンケート回答者の特徴 (設問 15)

[単位: 票]

性別	① 移民の歴史への理解が深まった。	② 自分が沖縄系であることを認識した。	③ 沖縄の伝統・文化・風土への理解が深まった。	④ 海外参加者と県民の交流が深まった。	⑤ 世界のウチナーンチュ同士の交流が深まった。	⑥ 世代間の交流が深まった。	⑦ 自国の文化を沖縄県民に紹介できた。	⑧ ビジネス交流が促進された。	⑨ 観光地としての沖縄の魅力を知ることができた。	⑩ 平和の大切さを感じる事ができた。	⑪ ウチナーンチュネットワークの次世代の担い手育成のきっかけになった。	⑫ その他	有効回答数	構 成 比 (%)
男	173	159	214	173	165	134	85	28	169	135	100	12	287	38.1
女	266	282	343	228	259	211	110	23	237	227	158	17	454	60.3
不明	7	4	5	7	7	3	4	0	7	2	3	0	12	1.6
合計	446	445	562	408	431	348	199	51	413	364	261	29	753	100.0

資料: 「第 4 回 世界のウチナーンチュ大会」アンケート調査

注: 設問 1 および設問 5 がともに有効回答である調査票は 753 票。

の多くがホワイトカラー、専門職である女性たちや、仕事と子育てを引退した後も沖縄までやってくるエネルギーを持った女性たちの数は多い。

大会の感想 (満足度) については、男女差はほとんどない (表 24)。大会の成果についても、ほとんどジェンダーの違いはなかった。女性は、「自分が沖縄系であることを認識した」、「平和の大切さを感じる事ができた」と答えた人の比率が、やや高かった (表 25)。他の設問についても、男女差はほとんどなかった。

今後の海外のウチナーンチュとの交流予定については、女性は、「ない」という人が「あ

表 26 性別・今後の交流予定別にみたアンケート回答者の特徴（設問 20）

[単位：票，%]

性別	① ある	② ない	合 計	構 成 比
男	137	122	259	38.7
女	197	205	402	60.0
不明	3	6	9	1.3
合計	337	333	670	100.0

資料：「第4回 世界のウチナーンチュ大会」アンケート調査

注：設問1および設問20がともに有効回答である調査票は670票。

る」という人をわずかに上回っている（表26）。男性は、逆に、「ある」が「ない」をわずかに上回っている。

今回の調査によって、女性たちが、ウチナーネットワークの中で分厚い層を成す、重要な構成要素であることが確かめられた。

女性たちは、すでにそれぞれの県人会において、また大会のような越境的なイベントの場で、役割を担っている。しかし、これまで、沖縄県系の越境的ネットワークを考える上で、いかに女性の担い手を位置づけていくかということは、あまり議論されてこなかったように思われる。このことは、ウチナーネットワークに参加する女性たちの多様性をていねいに検証し、ジェンダーの視点で沖縄県系のアイデンティティとネットワーク化をとらえなおすという、学術的な課題にもつながっている。

VI. 世界の沖縄系ネットワークの展望と課題—大会参加者の声を中心に

1) 感謝、誇りと紐帯の再確認

大会に対する自由記述の回答では、この大会が開かれたことへの感謝、ウチナーンチュであるということへの深い誇りと共属意識、そして大会の継続を熱望する声が最も大きかった（表27）。

「ウチナーンチュであることが自慢です!!!」（アルゼンチン，1世，男性）などの記述とともに、「ウラソエ，ナンバーワン!!!」などの、市町村単位での共属意識や誇りを示す記述も複数、寄せられた。沖縄県が大会を開催している期間、その過密なスケジュールの合間を縫って、参加者たちは、市町村ごとに開催される様々なイベントにも参加している。そこでの交歓に感謝する記述もあった。

多くの人々は、大会を通してアイデンティティを確認し、絆を確かめ合っている。このことに関しては、第4回大会は十分な成功を収めていると言えるだろう。

表 27 大会の感想 (自由回答：設問 14)

感 謝	1 「沖縄の人たちがこんなに、メンソーレ (ようこそ) の言葉に涙が出ました。」 (アメリカ合衆国, 1 世, 64 歳女性)
	2 「皆様のチムグループを受けて、もう一度がんばりたいと思います。皆様のご苦勞に感謝申し上げます。ありがとうございます。」 (アメリカ合衆国, 1 世, 68 歳女性)
	3 「マッチョットアンドゥー (注：待っていたよ、お帰りのさい) の横断幕をパレードのときに見たときには胸が熱くなりました。」 (アメリカ合衆国, 女性, 55 歳)
	4 「とても歓迎されたのを感じた。最初は、日本語を話せないものでちょっと心配だったが、たくさんの通訳の人たちがいて助かった。帰国したら、日本語を勉強します。そして沖縄に行ったら、もっとコミュニケーションできます。すばらしい経験になりました。ありがとうございます。」 (アメリカ合衆国, 3 世, 33 歳女性)
	5 「忘れられない旅になった。沖縄に来て、会ったことのない親戚に会えた。」 (アメリカ合衆国, 3 世, 57 歳女性)
	6 「沖縄県から、自分たちが忘れられていないことを確認した。」
	7 「とても感動的で強く大きな感情に包まれ、ウチナーンチュであることを幸せに思いました。次回も参加する予定で、子どもたちも連れてきたいと思います」
継 続 要 望	8 「私は 5 年ごとのウチナーンチュ大会参加と同時にふるさとを訪問し、親戚、友人、知人に会うことも何よりの楽しみです。が、それ以上に大事なことは、沖縄の地にて、先祖のご仏壇を拝むこと、それが一番大事です。ですからウチナーンチュ大会はぜひ五年ごとに沖縄で開催されることに、重々たる意義があります。」 (ボリビア, 1 世, 68 歳男性)
	9 「この大会をぜひ続けてください！」 (多数)
	10 「今から 2011 年の大会のために貯金します。」 (アメリカ合衆国, 3 世, 41 歳男性)
誇 り	11 「同じ郷里から世界へ飛び出したさまざまな人々が、同じ場所に集まり、沖縄の過去・現在・未来について語り合うことはすばらしいと思います。個人のルーツ、アイデンティティを知ることは大切です。」 (ドイツ, 1 世, 54 歳女性)
	12 「沖縄が、世界平和を推進するのに努めているのを、ありがたいと思った。」 (アメリカ合衆国, 3 世, 49 歳女性)
	13 「私はアメリカ生まれですが、沖縄のほうを故郷だと感じる。私は、オキナワンであることが誇らしい。」 (アメリカ合衆国, 2 世, 79 歳女性)
	14 「沖縄の子孫であることに感動した。」 (ブラジル, 2 世, 66 歳男性)
	15 「私は 63 歳ですが、ブラジルの沖縄人は特に日本人から過去の沖縄イメージを持たれ、下位に見られています。今回の大会と沖縄の発展はウチナーンチュであることに誇りを感じさせてくれ、ブラジルでも沖縄の理解のためにがんばるつもりです。」 (ブラジル, 2 世, 63 歳男性)
内 容	16 「各国 (県人会) 支部の交流の機会があったらよかった。」 (カナダ, 1 世, 49 歳男性)
	17 「バイリンガルのイベントがいると思う。」 (アメリカ合衆国, 3 世, 62 歳男性)
	18 「もっと他の国の人々と交流する時間があればいいと思います。」 (アメリカ合衆国, 3 世, 53 歳女性)
	19 「民間大使会議は意義が少なかった。」 (複数)：自由討論も結びもなかったなど。
	20 「ワールドウチナーンチュシンポジウムはよくなかった。」 (複数)：実質的な議論ができない、など。
	21 開会式の改善を求める声 (多数)：知事による関係者の表彰が冗長すぎる、など。
	22 「開会式のスピーチが長すぎて皆が興味を失ってしまった。」 (アメリカ合衆国, 3 世, 61 歳女性)
	23 「ウチナーンチュの交流を深める夜のイベント (パーティーなど) が少なかった。」
	24 「もし沖縄の政治史と移民史を結びつけて論じる、沖縄の政治や社会についての部会があったら面白かったらと思う。そういうことは今の沖縄にも影響しているし、今、議論する意義がある。」 (アメリカ合衆国, 3 世, 58 歳女性)
	25 「もっと沖縄の文化のブース (ガラス、陶芸) があっていいのと思う。もっとエイサーを観たかった。他の国の沖縄に関する演目 (舞踊、三味線、エイサー) を観たかった。」 (アメリカ合衆国, 3 世, 59 歳女性)

運営	26 「(大会は) とてもよく組織化されていた。ボランティアスタッフもよく教育され、礼儀正しかった。」(ブラジル, 3世, 29歳女性)
	27 開会式・閉会式場に入れなかったという声(複数): 「屋外で中継が見られるような施設を」(ブラジル1世, 70歳男性), 「録画してビデオを販売してほしい」など。
	28 「コンサートや開会式、記念品にお金を使うのではなく、その費用で各国の若者を招待できれば、次世代の担い手のきっかけが作れる。各国の現状のパネル展をしたら、理解が得られるのでは。」(日本, 28歳, 女性)
	29 「開会式・閉会式の画面の字幕が小さすぎて、英語が読めない。」(アメリカ合衆国, 3世, 42歳女性)
	30 「開会式の会場に到着して式を待つ間、食べ物も飲み物もなくて辛かった。」(アメリカ合衆国, 2世, 68歳女性)
準備	31 「大会までに、県庁から依頼される作業(県人への連絡、日程調整など)があまりに多かった。コンピュータが使えない県人会役員がいることを理解してほしい。沖縄県は、反省会を、県人会の代表を含めて持ってほしい。」(アメリカ合衆国)
情報	32 「プログラムがわかりにくい」、「もっと前から配布するか、ネットで情報を流してほしい」(複数)
交通	33 交通アクセスへのクレーム(複数): 「バスの時刻表の漢字が読めない」、 「駐車場が狭い。」など。
出店・屋外	34 出店業者(飲食関係)へのクレーム(複数): 「沖縄ソバがおいしくなかったのが残念」、 「なかみ、ゴーヤーチャンプルー、テビチなど(伝統的な沖縄の料理を)食べたかった。」(アメリカ合衆国, 2世, 51歳女性)
	35 イベントについて: 「屋外ステージが小さい。」「申し込みに時間がかかりすぎるイベントがあった。」など。
	36 「大会のロゴがついているTシャツを売ってほしい。」(複数)
交流	37 「沖縄の住民の人たちもイベントに参加すべきだと思います。」(アルゼンチン, 1世, 57歳男性)
	38 「もっと一般の県民と交流ができるようにしてください。」(アメリカ合衆国, 1世, 72歳女性)
	39 「学生を参加させたらいいと思う。」(アメリカ合衆国, 2世, 65歳男性)
	40 「若者(18歳から35歳くらいまで)のためのイベントがあったらいいと思う。」(カナダ, 3世, 28歳女性)
	41 「3世へのアプローチが必要」
今後	42 「今後の交流を支えるインターネットのネットワークがあったらいいと思う。」(複数)
	43 「うちなーぐちを忘れないでほしい。」
	44 「グローバル化された社会では、伝統を守るのが難しい」(ブラジル, 2世, 66歳女性)
	45 「もっと沖縄の魅力が知りたかった。」
	46 「もっと国内に(大会のことを)広報してほしい」(複数)。

2) 沖縄から学び、沖縄に示唆を与える人々

自由回答からは、回答者の世代による多様性が見出された。1世の記述の中には、「メンソーレ」や「チムグループ」などのウチナー口の単語が、熱い思いとともに現れる(表 27-1, 2)。「沖縄の地にて先祖のご仏壇を拝む」(表 27-8)という記述も、1世にとっての大会の意味が帰郷にあるということをよく示している。

一方、海外で生まれ育った世代にとっては、大会や沖縄滞在は、「会ったことのない親戚に会えた」(表 27-5)という記述にうかがえるように、家族・親族関係の絆を継承し、

再生産する機会になっている。

3世にとっては、大会は、日本語を学びたいという意欲を芽生えさせるきっかけになるなど(表 27-4)、沖縄や日本の文化との出会いと学びの機会となっている。「帰国したら日本語を勉強します。そして沖縄に行ったら、もっとコミュニケーションできます。」という記述からは、大会の果たしている文化継承の機能が、大会期間中に限らず、その後の参加者による自覚的な文化の獲得過程につながっていく可能性があることを示唆している。

いくらかの3世の記述からは、沖縄について学びたいという大きな願いがうかがえた。例えば、「沖縄の文化の展示ブースや芸能の上演」(表 27-25)を求める声の多くは、3世から寄せられている。中には、「沖縄の政治史と移民史を結びつけて論じる、沖縄の政治や社会についての部会を」(表 27-24)というような要望もあった。さらに、若者どうしで交流したいという要望や、「バイリンガルのイベント」(表 27-17)を求める声も寄せられた。

参加者たちが、沖縄の「伝統」や「本物らしさ」(オーセンティシティ)について、何を求めているかということも興味深い。はっきりしていることは、大会参加者たちは、海外からの観光客とは違うということである。いくらかの参加者たちは、それぞれの地域で、沖縄の「伝統」に触れる機会を持っている。とくにハワイからの参加者たちの中には、毎年のおキナワン・フェスティバルで、工夫を凝らした「おキナワン・ミックスプレート」などを楽しんでいる人も多い。ハワイのおキナワン・フェスティバルにおける沖縄料理には、オーセンティックなものを提供しようというコミュニティ・リーダーたちの理念が込められている³⁾。それにひきかえ、大会の会場で、業者の屋台が提供した料理の中には、これらの舌の肥えた、そして「本物の沖縄らしさ」を求める手ごわい客たちを、十分に満足させなかったものもあるようだ(表 27-34)。

他にも、「うちなーぐちを忘れないでほしい」(表 27-43)、「グローバル化された社会では、伝統を守るのが難しい」(表 27-44)など、海外の沖縄県系人が、「本家」沖縄に対して、伝統への愛着や、変動に対する危惧を伝えようとする記述があった。この、「本家」と「分家」の逆転現象は、きわめて興味深い。海外からの参加者たちは、沖縄から学ぶだけでなく、沖縄について、さまざまな示唆を与えてくれる存在でもあるといえるだろう。

3) 今後の課題

大会の内容についての要望としては、セレモニー的な要素の占める比重を少なくして、参加者の交流、またエイサーなどの沖縄の文化を楽しめる機会を増やしてほしいという声が多数、寄せられた。アンケートの自由記述からは、大会において、参加者どうしが話し合ったり、大会後の日常の交流につながる関係を作ったりするなどの、実質的な交流への要望が大きいことがうかがえる。

大会参加者の中で、海外で生まれた世代の占める比率は、今後も増加していくと考えられる。参加者たちは、沖縄に集って何をするのか、大会がその後、参加した人々にとってどのような意味を持つのかという、交流とネットワークの実質を問うている。

主催者である沖縄県は、地元の人々ともっと交流したいという参加者の声に、耳を傾ける必要があるだろう。また、3世以降の世代、とくに若者たちの出会いと学びあいの機会を設けることは、人材の育成と「次世代への継承」のために、きわめて重要な課題である。

それについては、大会主催者だけの責任というよりも、沖縄県内の教育・研究機関も、役割を果たす可能性がある。世界のウチナーンチュのネットワークがこれほどの広がりを持つということの意味を、沖縄県内に住む人々、とくに若い世代に問いかけていくことは、海外の沖縄県系人と沖縄在住の県民の両方にとって、意義のあることだと思われる。

世界のウチナーンチュ大会は、言うまでもなく、非日常の祝祭である。それが、海外に生きる沖縄系の人々の日常とどのように結びつき、日常の中に溶け込んで、作用を及ぼしているのか／いないのかということを検証していくことが必要となってくる。第一に、個人のレベルでは、例えば大会を通じて日本語を学びたいと思った人は、本当に学び始めているのだろうか。第二に、沖縄系の団体・組織のレベルでは、大会の成果をどのように振り返っているだろうか。次世代の担い手は、育ちつつあるのか。そして第三に、越境的ネットワークのレベルでは、大会で出会った人々は、国境を越えて、実際に連絡を取り合い、関係を深めているのだろうか。また、大会に来なかった／来ることのできなかつたたくさんの方々の沖縄系の人たちにとっては、「越境的ネットワーク」とは、どのような意味を持つのだろうか。

大会参加者を対象とする調査のデータは、世界のウチナーンチュの日常と現実の次元に広がるさらなる考察へと、我々をいざなっている。

附記

このアンケート調査の記入・回収に協力を頂いた皆さんに記して感謝します。

注

- 1) 「世界のウチナーンチュ大会」についての学術的な調査研究は、これまでほとんど行われてこなかった。第4回大会では、筆者を含む琉球大学の研究グループと、大会実行委員会が合同で、主に海外からの参加者を対象とするアンケート調査を行った（金城，2008）。20項目の設問からなるアンケートを行い、794票の有効回答を得た（鍛塚，2008）。データは琉球大学の研究グループと沖縄県が共有し、世界に広がるウチナーネットワーク

クのダイナミズムについての学術的な研究に資するとともに、今後のネットワーク化に向けての支援など、沖縄県がすすめる取り組みにも活用される。この研究をすすめてきた琉球大学のグループは、研究代表者：金城宏幸、研究分担者：楯塚賢太郎、野入直美から構成され、科学研究費補助金基盤研究（B）「沖縄社会の越境的ネットワーク化とダイナミズムに関する研究」（代表者：金城宏幸、課題番号 17401006、平成 17-19 年度）の一環としてこのアンケート調査と分析を行った。

- 2) 沖縄県では、2006 年度より、「ホームステイを通して、県内の若い世代と海外県系人の若い世代が交流することにより、県民の国際交流の促進と海外県系人社会の活性化、そして、世界のウチナーネットワークの拡充を目的とする、『ホストファミリーバンク推進事業』」を実施している。2006 年度は、県内の若者を、海外の沖縄県人会が世話をする海外でのホームステイに派遣したが、2007 年度からは、海外の沖縄県系人の若者たちを沖縄県内のホームステイによって受け入れる事業に向けて動き出した。2007 年 11 月現在、沖縄県は県内でホストファミリーを募っている（沖縄県庁ホームページ、2007 年 11 月現在）。
- 3) 白水繁彦(2006)「フェスティバル、フード、そしてアイデンティティ～ハワイにおける「沖縄料理」の政治学序説～」『武蔵大学総合研究所紀要』No. 16, 武蔵大学総合研究所, 参照。

参考・引用文献

- 金城宏幸, (2008)「世界のウチナーンチュ大会」と沖縄県系人ネットワーク (1) —沖縄社会のダイナミズム—. 移民研究 (琉球大学移民研究センター) 第 4 号 83-96.
- 楯塚賢太郎, (2008)「世界のウチナーンチュ大会」と沖縄県系人ネットワーク (3) —テクニカルノート: アンケート調査の方法とデータベース化—. 移民研究 (琉球大学移民研究センター) 第 4 号 117-131.
- 白水繁彦, (2006), フェスティバル, フード, そしてアイデンティティ～ハワイにおける「沖縄料理」の政治学序説～. 武蔵大学総合研究所紀要 (武蔵大学総合研究所) 第 16 号

(のいり なおみ・琉球大学移民研究センター准教授・社会学)